

## 旧制中学校国語漢文科用教科書『国語』の特色（一）

武 藤 清 吾

（広島経済大学経済学部准教授）

### 一 『国語』考察の意義

西尾実が中心となって編集した岩波編集部編旧制中学校国語漢文科用教科書『国語』は、日本の「国語」教育史上画期的な教科書であった<sup>1</sup>。その刊行の意義については、『国語国文の教育』に示された彼の「国語」教育論をもとに「西尾実の教養論と教材論<sup>2</sup>」で考察してきた。

本稿では、西尾の掲げた言語活動論の具体化としての『国語』の特色を考察する。そして、収められた教材や西尾の考え方を整理して教養形成の視点からどういう意義を持った教科書であったかを明らかにしたい。

考察にあたり、西尾の編集意図や学習指導面での配慮に注意していきたい。どの教科書も時代の制約から自由になることはできない。『国語』は、現代の目から見ても味わい

深く分かりやすく編集された優れた教科書であることは間違いない。しかし、『国語』も当時の帝国主義的国家政策や尊皇思想の影響から逃れられず、その影響下にあったことも否定できない。そもそも、それ以外の教科書が検定合格書として流通する環境にはなかったというのが実際である。西尾も、その状況下で、すぐれた教養を「国語」教育の現場に提供する方法はないかを苦心したはずである。その努力のあとをよく見ておきたい。もちろん、西尾の教育研究の足跡を無謬神話のように絶賛することは学問的でない。西尾もそんな研究を喜びはしない。

『国語』の教授書として西尾らによる『国語 学習指導の研究』（以下『研究』と略記する）も刊行された。『研究』には、西尾の「国語」教育論の具体化の産物としての教科書『国語』を編集した立場を示している。『研究』は、各巻

四百頁から七百五十頁に及ぶ大部な解説書である。「緒言」で、「『国語』編纂の趣意」、「学習指導研究の組織」の二項を立て、『国語』編纂の立場を解説している。

そのなかの、「イ 表現に生命あり結晶あるもの」という項で、教授要目の「健全ナル思想、純美ナル国民性ヲ涵養スルニ足ルモノ」という国語講読教材の指導精神に対応して、西尾の教材観として三分類を示している。「国民的教材」、「文芸的教材」、「文化的教材」と柱立てして『研究』で示される解釈の基準としている。

「国民的教材」は、教授要目の「国民的陶冶」に対応することも明示されている。具体的な素材としては、国体の精華、民俗の美風、賢哲の言行が掲出されている。また、「口国民的教材」の項で、「国民的なる意味」は、「悠久三千年の歴史を通じて現れ、国民生活のあらゆる事象を基礎づけてゐる、しかも普く世界に光被すべき底の真理の顕現」としての意味、「二に人間力・意志力によつて国の発展を尽さなくてはならない現実日本に立脚し、しかも従来世界のあらゆる先進文化を摂取し来つて、今や独自の日本文化を世界文化の上に建立すべき歴史的使命を帯びて立つてゐる国民としての」意味であると述べている。

従来にない新鮮な「国語」教科書として『国語』を編集した西尾も教授要目の拘束からは自由になれず、「国民的教

材」をこのように定義したところに国民精神を涵養する教材や尊皇思想に傾斜する教材を一定程度含みこむことになった要因があった。その根本的なものは、「西尾実の教養論と教材論」で分析したように、西尾の行的認識論の閉鎖性にある。他者性への視点に欠けた教養観で自閉してしまつたのである。日本人一人ひとりが国民精神を涵養することで国力を育てるという自閉の論理からは、他者との共同による教養形成という観点は出てこないのである。

朴貞蘭「西尾実と『国語科』教科書——戦後検定期初教材における「連続性」の問題を中心に——」<sup>3)</sup>は、『国語』巻一の西尾自身の「生きた言葉」が、価値観が逆転したはずの戦前戦後に共通して使われていること、「音声教育」の重視が戦前戦後に共通しており、戦前の音声教育がナショナリズムを喚起し愛国心教育に活用されたことを指摘している。しかし、これは仮説だが、西尾は『国語』の教材配列を進めていく過程でその弱점에既に気づき始めていた節がある。一部の巻に国民的教材を集中させることで、他の多くの巻を自分の好む文芸的教材、文化的教材で自由に編集しているように見受けられるからである。中学一年次『国語』で学んだ諸井の指摘（後掲）はそのことを物語っている。

『国語』は影響力が大きかっただけに、そこに内包された二〇世紀前半の「国語」教育の問題も多い。本稿では、そ

うした『国語』の特色を浮かびあがらせるために、全十巻に収められた二百二十篇の教材を各巻ごとに丁寧に見ていくことにしたい。煩雑な作業ではあるが、そこから結果として西尾の考えていた「国語」教育観が描出されるのが望ましいと考えた。主な視点としては、行的認識、国民精神の涵養、尊皇思想、自然、追憶、家族、学問、芸術などに絞っておきたい。

また本稿では、主要には『国語』に収録された現代文（同時代文）教材を中心に考察する。古文については、『国語』全体や現代文教材の考察に必要な範囲で述べていくこととする。ただし、巻五以降は古文の収録数も多くなり、特に巻九・十は、古代から現代までの文学史的配列で構成されている。そこで、『国語』全体に関して言及するさいには、古文も細部にわたって論じることとする。

## 二 『国語』各巻の構成と内容上の特徴

### （一）第一学年—巻一と巻二—

#### 1 巻一について

巻一のテーマは、国語とは何かを具体的に実感させること、何を学ぶ教科であるかを理解させることにある。具体的には、行的認識のわかりやすい姿、家族、追憶、童心、尊皇思想、自然が中心である。

巻一では、中等教育の出発期の学年であることを考慮して、それにふさわしい教材が選ばれ、バランスよく配置されている。また、初学者への配慮として上級学年で和歌や短歌、古文を学びやすくなるような工夫がある。

巻一には、小説四、童話一、随筆七、紀行文二、伝記二、詩一、短歌一、説明文三、報告文一、古文三の二五篇に、漢文教材が三篇収められている。

#### 行的認識

冒頭には西尾実の書き下ろし「生きた言葉」が配置されている。「生きた言葉」は、西尾の行的認識の教育観がよく示された文章であった。巻一の後半では、「生きた言葉」に呼応させるかたちで古文や漢文も配して行的認識にもとづいた文章を採録している。

二一課「用水」（遺老物語）は、実践的な知恵を活かして用水整備を進めた武士の話である。二二課「かんにん」（柳沢淇園）は、「法句経」の一節「怨は怨を以ては終に休息を得べからず。忍を行じて怨を息むるを得ん」が文末に置かれた。二三課「藤樹先生」（橘南谿）では、儒学者中江藤樹の儒の教えと弟子の熊澤蕃山の弟子入りのいきさつが述べられる、そして、清作少年の少年時代の刻苦勉励を描いた二四課「野口博士の少年時代」（野口英世）がある。

また、漢文「人」や「実語教」を採録して、日本人の精

神形成や教養形成に大きく与かった漢文の入門としている。  
国民精神の涵養、尊皇思想

次に、二課「桜」（芳賀矢一）、三課「曙の富士」（小泉八雲）、四課「明治天皇御製」と教材を配置している。桜、富士、明治天皇の短歌を組み合わせることで、「日本」を象徴的に表現している。ここに『国語』の一つの特徴がある。明治天皇の短歌一首は、富士、桜、鯉、馬（駒）、水鳥、若草、草枕（旅）、都を題材に詠んだものである。皇室関係は、このほかに、明治天皇の気象台などへの行幸を報告した新聞記事の一一課「八丈島行幸」（藤原咲平）、勤皇の牧畜家と乃木將軍の交流を描いた二〇課「愛馬」（櫻井忠温）、日清、日露戦争での「日の丸」の威力を語った二五課「国旗」（日の丸由来記）と続いている。

#### 自然

一方で、二課「桜」、三課「曙の富士」を基調に日本の自然の美しさを描いた文章を集めているのも巻一の特徴である。人影まばらな比叡の山寺と森の鳥を描いた一〇課「山寺」（若山牧水）、上高地や穂高の溪谷美を描いた一六課「上高地」（田部重治）、霧の立ちこめる湖畔の秋を描いた一八課「湖畔」（杉村楚人冠）には、日本の自然美が重ねて表現される。一五課「苺と芙蓉」（正岡子規）には、芭蕉の「奥の細道」の跡を辿った奥羽行脚の途次に山中で木苺をたく

さん食べたことや、信州で路傍の家のたくさんの苗代芙蓉をいただいたことが味わい深く述べられている。

また、こうした自然の美を描いた情意表現とともに、自然を科学として理的に見つめる目を養う配慮がなされている。みずすましの生態観察について書かれた五課「春の使者」（横山桐郎）、蜂の巣観察記の九課「蜂の巣」（吉村冬彦）、空の色について気象学者が書いた一七課「空の色」（岡田武松）などがある。

#### 追憶、童心

柿の木に上った少年を描く一三課「屋根」（志賀直哉）は『暗夜行路』の一節である。家庭から禁じられた水泳をする少年を描く一四課「水泳」（飯田蛇笏）もある。母に怒られながらも柿の木に上る嬉しさ、雑木林を下りて谷川で思う存分泳いで帰る冒険は、甘い追憶とともに少年期の心性を見事に描いている。

晩ご飯になるまで遊びに夢中だった少年時代を描いた七課「夕がたの遊」（中勘助）は『銀の匙』の一節である。『洗心雑話』の一九課「良寛さま」（北原白秋）に描かれた良寛和尚の童心とともに印象深い。二四課「野口博士の少年時代」も、少年期の不安や希望を巧みに表現している。

#### 小説、童話

小説、童話は、さきの七課「夕がたの遊」に加え、短編

集『心』の「保守主義者」の一節である三課「曙の富士」(小泉八雲)、『草枕』の六課「峠の茶屋」(夏目漱石)、一二課「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)、『暗夜行路』の二三課「屋根」(志賀直哉)の五篇である。巻一の特徴はこの五作家を並べたところにある。

## 韻文の扱い

詩は千家元麿の詩が二篇ある(八課「詩二篇」)が、短歌は目次には見られない。しかし、各課の文末に適宜短歌が配されている。文章の指導にあわせて、授業者が短歌の指導もできるように工夫がなされている。たとえば、五課「春の使者」文末に、子規の「解けそむる野川の春の水浅み小鮎かくれつ古草の根に」、七課「夕がたの遊」文末に、中勘助の短歌「わが庵に花はなけれどさみしくもなしおとなり」の菜のほないまさかりなり」がある。一九課「良寛さま」には、「この宮の森の木下に子どもらと手まりつきつつ暮しぬるかな」「かきてたべつみさいてたべわりてたべさて其ののちは口もはなたず」の良寛の二首がある。

## 2 巻二について

巻二のテーマも巻一に続き、行的認識の具体的な姿、帝国日本の姿、自然、家族、追憶、童心を学ぶことである。

巻二には、小説三、随筆七、紀行文一、伝記一、戯曲一、詩二、短歌一、評論一、説明文二、報告文一、古文二の二篇に、漢文教材が二篇収められている。

## 行的認識と労働

七課「快晴(詩)」(河井醉茗)は、都会で働く人の幸福について謳う。「かひがひしく働いてゐる時に私にも場所がありそして幸福があるのです」は、働くことの意味を感じさせる。

八課「潮待つ間」(幸田露伴)は、潮の流れが変わるのを待つ間に舟人から聞いた心得を伝えている。読む者は、舟人はただ舟を漕いでいるのではなく、舟を扱う細心の心構えがあることを知る。

一〇課「親心」(柳澤淇園)は、吉野の勤皇家長年が幼い童との約束を守った「約束の松」の話、家族のために石臼の目を切る仕事に精進する男の話、大酒飲みの悪僧が改心した話である。どれも、人の道を説いている。

「白石朋ヲ薦ム」(原善)は、母親が昇進を待ち望んでいた人を先に昇進してもらおうように働きかけておき、自分自身は昇進を遅らせたという白石の逸話を紹介している。この漢文のあとに、九課「父の物語」(新井白石)が載せられている。

一一課「カルサンと米」(島本赤彦)は、郷里で農業をし



ながら作歌をしている友人を語る。文末の「彼の優秀な歌は、米一斗を信濃山中から東京まで背負って来る根気と真情とから生まれ出るのである」に、筆者の思いがよく表現されている。

一八課「人間エディスン」(澤田謙)は、睡眠も集中する精力主義、時代の動きに歩調を合わせる態度、楽天主義、質素、謙遜な心の特徴としているエディスンの伝記である。「自分の衷に怠けようとする傾向の起つてくるのを許してはならないことを体感している」とするところなどは、西尾の衷に対する考え方と同じである。

どれも、人が生きて働くうえでの道を説いた文章である。

### 国民精神の涵養、尊皇思想

一課「日本」(山村暮鳥)は、「美しい国、日本」への期待を述べる。二課「明治神宮」(溝口白羊)では、神宮建立までの代々木の森の様子、建立された神宮の美しさを謳っている。一七課「両雄の会見」(小笠原長生)は、東郷平八郎がルーズベルト大統領と会見し、天皇から預けられた刀を手渡したことを述べている。二二課「国史に還れ」(徳富蘇峰)は、大和民族の伝統を説いた評論である。『日本書紀』『実祚無窮』『漢文教材』で巻二を締めくくっている。巻二も、冒頭と巻末に帝国日本と天皇制関連の教材を置くとい

う枠組みである。

『研究』では、「巻一では、国土愛・国家愛の象徴として二「桜」・三「曙の富士」・二五「国原」を掲げて来た。巻二では、一「日本」・二「国史に還れ」等に於て、直接国土愛・国家愛等を喚起し、覚醒させようとしてゐる」と述べている。

### 自然

三課「自然に対する五分時」(徳富蘆花)の出典『自然と人生』、五課「落葉」(島崎藤村)の出典『千曲川のスケッチ』は、明治期の教科書にすでに収録されている息の長い作品である。相模湾と富士の秋の情景、武蔵野の秋とは違う山の秋を描く。一三課「武蔵野日記」(国木田独步)も、現在の国語教科書まで収録されてきた。武蔵野の九月の情景を描いている。関東一円の秋の対比的な構成は見事である。

四課「小春の岡」(長塚節)は、筑波山の秋の情景を描写した随筆である。節の秋の和歌が文末に添えられている。一四課「時雨(和歌)」は、前田夕暮の初春の歌、若山牧水と北原白秋の冬から春の歌を並べる。

六課「渡り鳥」(松本亦太郎)は、渡り鳥の行路、距離、速度、それを可能とする筋力について説明する科学的な説明文である。一九課「蜃気楼」(橋南谿)は魚津の蜃気楼

二〇課「庭の黒土」（相馬御風）は、春先に芽を出す植物の生長を描く。ともに冬から春にかけての自然の神秘や力強さを表現する。

このように秋から冬、初春にかけての自然を細やかに描いた随筆と日記、和歌、自然現象を説明する文章をあわせて掲載している。

#### 追憶、童心、家族

九課「父の物語」（新井白石）は、父の所領を若くして受け継いだ男の話を父が折に触れて語った話である。一二課「トロッコ」（芥川龍之介）は、トロッコの現場で働く土工に誘われて行ったばかりに暗くなって家に戻らなくてはならなくなった少年期の不安を描く。母の顔を見て泣き崩れる少年の思いが切なく伝わる。現在まで中学校教科書に採られている。一五課「吹雪」（村井弦斎）は、吹雪の山中を越えて母に会いに行った少年と、その少年に一人前になってから会うはずだ、約束が違うと涙がちに追い返す母の姿を描いている。二二課「犬ころ」（長谷川二葉亭）も、一九世紀後半の教科書から長く収録された作品である。犬のポチをめぐる家族の様子が描かれる。どの作品も温もりのある家族の様子が追憶の思いを重ねて描かれている。

#### 小説、童話

一二課「トロッコ」（芥川龍之介）、一五課「吹雪」（村井

弦斎）、二二課「犬ころ」（長谷川二葉亭）の三篇である。先に見たように、どれも家族の物語を描いた佳品である。巻一と同様に、巻二に収められた作家に特徴がある。村井弦斎の「吹雪」は、『少年文学』に掲載され人気を呼んだ伝記的作品「近江聖人」の一節である。

#### 韻文の扱い

韻文は、七課「快晴（詩）」と一四課「時雨（和歌）」である。このほか、巻一ほどではないが、各課の文末に短歌を付けたものがある。

#### 歴史

一六課「勿来の関（戯曲）」（岡本綺堂）は、安倍宗任と源義家の勿来の関での別れを描く。

#### （2）第二学年―巻三と巻四―

##### 1 巻三について

巻三のテーマは、行的認識を體現した人物像、自然、家族、故郷に加え、新たに歴史、学問、文化を学ばせることにある。

巻三には、小説二、随筆五、紀行文三、詩一、短歌一、説明文三、報告文二、書簡文一、古文三篇が収められている。

## 行的認識と人

一課「大和言葉」(五十嵐力)は、「牛を牽く」と「牛を追う」の言葉遣いの例から日本の大和言葉の奥深い心理を考えさせる文章である。『研究』では、「第二学年に於ては特に国語愛の啓発・養成を重要な目標とする編纂を試み、本文をその出発点とした」と解説されている。

三課「島四国」(荻原井泉水)は、四国の遍路の代わりに、小豆島を遍歴する「島四国」をしたという紀行文である。宗教的経験を越えて、弘法大師との「同行二人」、道行く人との「同伴者」としてともに修行することにあるという。

八課「興国の樞」(内村鑑三)は、小国「デンマーク」を、富の程度が高く、生活の平和幸福で世界から羨望される国に育てたダルガスの物語である。「国威発揚」の匂いがないわけではないが、帝国の論理までは感じさせない。そのことよりも、水と樹木で荒地を開墾してデンマークを再建した人物の先見性と度重なる労苦に編集者である西尾の関心は向いている。

一〇課「天徳寺了伯」(湯浅常山)は、琵琶法師の宇治川の先陣、与一の扇の的を聞き、天徳寺の領主が涙した、そのいわれを語る。人の道を考えさせる内容である。

## 国民精神の涵養、尊皇思想

九課「日本海の手戦」(官報)のみである。日露戦争での日本海艦隊の闘いを報告している。

### 自然

二課「潮の音(詩)」(島崎藤村)は、七五調の文語定型詩である。海の浪の永久の調べを奏でている。

六課「雨」(山口青邨)は梅雨時の植物の記録、一五課「金華山」(長塚節)は金華山に棲む動物、一六課「雑草」(齊藤茂吉)は春から夏にかけての雑草、一九課「霧島山」(橘南谿)は山頂までの道のりの様子を、それぞれ描いている。追憶、童心、家族、故郷

四課「おたまじやくし」(島木赤彦)は、東京に引っ越してきて友達ができなかった子どもたちが、おたまじやくしをすくって来て遊んでいるという随筆である。五課「山の手の家」(中勘助)は、神田から小石川に引っ越した際の回想記である。寺の柿の木、裏の畑の果物、野菜、垣根の栗の木の思い出が語られ、文末に勘助の二句が添えられている。

一二課「恩師へ(書簡文)」(野口英世)は、野口五十歳の恩父宛の手紙である。野口の実父母は既になく、小学校時代、野口を医学の道に志ざさせた恩師小林先生と養子縁組をしていた。野口家三代にわたり援助を受けたお礼を述



べたうえで、南アメリカでのトラホーム研究の進展を報告している。野口はその後西アフリカへと渡る。

一八課「石をきぎむ（和歌）」（石川啄木 窪田空穂 木下利玄）は、啄木の故郷への思い、空穂の自然詠、利玄の夏から冬の村の様子と、自然と故郷とを重ねて詠む作品が集められている。

引越し先での新しい生活を作る話と故郷へ心を寄せる話が巧みに組み合わせられている。

#### 小説、童話

小説は、五課「山の手の家」（中勘助）に加え、一四課「焚火」（志賀直哉）がある。誰にも知らずに見舞いに行った人物に、迎えが来たという内容の佳品である。幻想的な作品を選んだところに、西尾の目がある。

#### 歴史

七課「千本松原」（伊藤左千夫）は、沼津の町から旧東海道に出て千本松原で平維盛の子六代の松を見にきたときの紀行文である。一一課「伊達政宗」（新井白石）は、関が原合戦時の逸話を語る。本国に戻る政宗は相馬義胤の所領に入った。相馬は、年来の敵を打たず見逃す。合戦後、相馬は断絶せず所領を与えられる。

#### 学問・文化

一三課「心の小径」（金田一京助）は、南樺太で樺太アイ

ヌ語の採集をしたときの記録である。一七課「昆虫の本能」（ファール）は、はなだかばちの生態観察記録である。細かな動きをしっかりと観察する科学者の目が伝わる。二〇課「鴉勸請」（柳田国男）は、雲仙ゴルフ場の鴉が玉をくわえることから、「鴉勸請」の意味を考察するという民俗学的な考察である。二二課「学者の苦心」（芳賀矢一）は、上田、松井両氏の国語辞典編纂の苦勞について述べる。こうした学者の仕事は地味であり、世人を驚かすことはない。しかし、これは大きな国家事業でもあるのだと辞典編纂の意義を強調している。どの学問についての記述も、その学問分野での学者の苦勞が語られている。

#### 韻文の扱い

詩の収録は、二課「潮の音」（島崎藤村）のみである。四課「おたまじやくし」（島木赤彦）の末尾には、赤彦の「はるばるに家さかり来て寂しきか子どもは坐る畳の上に」、「うつり来ていまだ解かざる荷の前に夕飯たべぬ子どもと並びて」の二首がある。五課「山の手の家」（中勘助）にも、中勘助の俳句「おとなりの 菜の花は種となりけり」「さきのこる 白豌豆のすずしさよ」の二句が文末にある。文末に短歌をつけるのは、この巻では多くなくなっている。短歌自体が課題になっているのは、一八課「石をきぎむ」（石川啄木 窪田空穂 木下利玄）のみである。

ここでも引き続き上級学年での和歌、短歌学習に備えて、帯単元のような形で短歌が添えられている。

## 2 巻四について

巻四のテーマは、行的認識を体现した人物像、自然、学問、芸術、スポーツ文化、生活・労働を学ぶことにある。

巻四には、小説二、随筆九、小品一、紀行文一、伝記二、戯曲一、短歌一、俳句一、評論一、古文五篇の二四篇が収められている。

本巻では、さまざまな人の生き方を紹介して、その人生に見られる道の意義を説いた文章が多く採用されている。次に見るように、行的認識の育成を目的とした教材を多数そろえている。

### 行的認識

二課「暁鍾」（奥田正造）では、朝夕鐘を仏と思って撞いた小沙彌、松の落ち葉一つひとつを拾う和尚、庭掃除をする際、二三の落葉を庭に点じ寂びた庭を作った利休、「兎角きれいなるは悪し」だが、「きれいなのでさへよくないのにむさいのは尚更よくない」と教えた小堀遠州の話が並べられている。大成する人たちの道を究めた味わい深い話である。

五課「師の言葉」（武者小路実篤）は、「自分に許された範囲で出来るだけ自分を立派に生かしていたものは、必ず自分の求める世界を必要だけ獲得していける」と述べている。そして、日常生活の美しい人、自己を反省し心を常に道から放さないようにつとめる人は人類の宝であるとする。重荷を背負うとき、大国主命の例を思い出すとも言う。最後に、この世は無限に美しい、この世に生まれてきたことを感謝すると結んでいる。

六課「青木新兵衛」（室鳩巢）と七課「板倉父子 板倉勝重 板倉重宗」（新井白石、八課「將軍吉宗」（菊池寛）は、武士の生き方を述べる。青木新兵衛は合戦で武士道を見事に示したばかりでなく、対戦相手と後に出会ったときも、相手の鎧の緋、馬の毛色まで覚えていたという人物伝である。

七課「板倉父子 板倉勝重 板倉重宗」も、一組の親子の武士道を示している。駿河の家に町奉行を命ぜられた板倉勝重は、不正に陥らぬよう妻と相談したいという。当時の不正には、妻が関与している場合が多かったからである。伊賀の守になっても私心なき政治を心がけ、人心が安定していた。勝重の嫡男重宗は、茶を挽くことで自分の心の乱れを知る努力をしていた。訴願を受けるときは、明障子を隔てて聞く。訴願する人の顔色を見ればわかるという。

誠は偽らないことだけではない。どんなものにも誠はあり、奪ったり隠したり覆ったりすべきではない。

八課「將軍吉宗」は、將軍吉宗の名君ぶりを二つの逸話から説明している。御腰物筒を落とし割った武士に「綱づいても手放さなかったために割れたのだ」と、また視察先で不作を豊作と答えた武士に「時の挨拶で不快な思いをさせない配慮だ」と、過失を犯した武士の心を斟酌して咎めなかった。菊池寛は「よく人情の微を察し、よく人間的な過失を許す点において、古今の名君である」と述べている。

一五課「誠」(三浦梅園)は、誠の意義について述べている。誠は偽らないことだけではない、どんなものにも誠はあり、奪ったり隠したり覆ったりすべきではないという趣旨である。

一六課「惜陰」(貝原益軒)は、幼児から努力して学問を修め一生の宝にすることの大切さを述べる。

二〇課「二宮尊徳の幼時」(富田高慶)は、伝記である。父を失い極貧となった二宮家の母、二男を助けるために、苦学した金次郎の姿を詳述している。

二二課「西郷の一言」(勝海舟)は、敵である勝との会談で礼儀正しく度量大きく対応した西郷を敬意を持って描いている。

二二課「天」(西郷隆盛)は、正道を踏み、至誠を推し、

克己に終始し、天を相手にするべきであると述べる。

### 国民精神の涵養、尊皇思想

三課「庭前の榎の樹」(浜口雄幸)は、永田町首相官邸の庭前にある榎の大樹が未来永劫に栄えることを祈っている。これが元首相という経歴の筆者による一文であることを考慮すると、大樹に期待する比喩で日本の繁栄への期待を語っていると言わなければならない。

### 自然

四課「あづきの紅葉(和歌)」(伊藤左千夫)(長塚節)(島木赤彦)(斎藤茂吉)は、それぞれ秋から冬、初春にかけての植物や鳥などの自然を詠んでいる。一一課「風」(徳富蘆花)は、木枯らしが吹き始めた十月と相模灘の十二月の記録である。一二課「遠望」(吉江喬松)は、初冬の武蔵野の森を描く。落葉した木々にとまる鳥にくわえて鶯も来る森に夕日が落ちかかる情景が丁寧に表現されている。文末に「絵にもならず歌もならず武蔵野は只はろはろに山なしにして」、「武蔵野の空の限りの筑波嶺に我居家より低くおもほゆ」の子規の二首が付けてある。

一三課「文鳥」(夏目漱石)は、文鳥の仕草を細やかに観察した小品である。

### 追憶、童心、家族、故郷

一課「初旅」(島崎藤村)は、東京に遊学したときの紀行

文である。主人公九歳、同行の銀さんは十二歳であった。当時はまだ鉄道もなく苦勞して峠を越えていったことや、馬車で七日間かけて神田まで出たことが記されている。

二三課「厨子王」(森鷗外)は、姉と弟の絆を描く。安寿は、山椒大夫から厨子王を守りぬくために、自分を犠牲にして厨子王を国分寺にかくまうことにしたという場面を採録している。

#### 小説・童話

九課「柿二つ」(高浜虚子)は病床六尺の子規を描く。病床で投句箱の整理をし終えた子規は、京都の禅僧からもらった柿二つを食べた。渋い柿の方が旨いとわかったと記されている。文末に「三千の俳句を閲し柿二つ」の句が載る。

#### 学問・文化・芸術・スポーツ

一四課「夜叉王(戯曲)」(岡本綺堂)は、面職人の心を描く。源頼家より面を頼まれた夜叉王は、面がなかなか完成させられないでいた。しびれを切らした頼家の督促にしぶしぶ仮面を出したものの、その面は死人の仮面であると夜叉王は語る。しかし、頼家は気に入って持って帰る。夜叉王は、あんなものが將軍家にあると思うと職人として情けない。槌を持つのをやめると言う。権力者を以てしても優れた芸術が生み出せるわけでないことを夜叉王の苦悩に見る。死相の出た仮面、怨霊怪異の面というあたりは、大

正期に幻想が流行した動きを映し出している。

一八課「銀線を描く」(浦松佐美太郎)は、ヨーロッパでスキーの体験をしたことを述べている。西洋文化をスポーツの面から学ばせる教材として興味深い。

一九課「創始者の苦心」(杉田玄白)は、ターフル・アナトミアの翻訳を、苦勞してやりとげ「解体新書」として完成させた苦心談を述べている。

#### 生活・労働

一七課「湖畔の冬」(島木赤彦)は、湖畔の冬の村で行われる労働を紹介している。赤彦の故郷である諏訪湖では「たき」「やつか」という漁勞がなされ、湖上では氷切の作業が行われる。家内では、草鞋、雪沓作り、機織りが行われると、しみじみとした筆致で語っている。

二四課「神国の首都」(小泉八雲)の題名は、皇国の意味あいではなく、神秘的な東洋の日本という趣旨である。出雲の国産み神話を念頭に置いているが、筆者の目は民衆の生活に向けられている。出典が「未だ知られざる日本」であることから、そのことが推測される。生活や自然の中にある音や色を基調にした滋味に富んだ文章である。小泉八雲の住む松江では、米搗きの音、鐘の音、物売りの声で目が覚めると言う。宍道湖に注ぐ鏡のような川の光沢、薄色の霞たなびく湖水に日の光が映り、「味爽の空と一つ色

の、美しい幻の海となって見える」と、筆者の細やかな観察が続く。川端の庭先からは、拍手の音が聞こえる。その光景を八雲は「手も足も裸の獵師が、黄金色をした東雲の空を拝んでゐる」と述べている。それがやむと仕事が始まる。大橋の上で、仕事に出る人が鳴らす下駄の音も「舞踏の音のやうで」、その足は「皆小さくて、均斉を得てゐて、ギリシヤ古甕に描いた人物の足のやうに軽やかである」と続けている。松江の自然の織りなす風景に溶け込んだ働き生活する民衆の姿を見事に捉えている。

#### 韻文の扱い

四課「あづきの紅葉（和歌）」には、伊藤左千夫の歌二首、長塚節、島本赤彦、斎藤茂吉の歌がそれぞれ三首、合計十一首が採られている。一〇課「夜長（俳句）」（正岡子規）は、秋の俳句十五句を並べている。一二課「遠望」（吉江喬松）の文末に子規の二首が付されている。

### （3）第三学年—巻五と巻六—

#### 1 巻五について

巻五のテーマは道の意義と具体、尊皇思想と国民的自覚の発揚、自然紀行を学ぶことにある。特に国民的情操の育成が目指されていることに注目したい。

巻五には、小説二、随筆五、紀行文二、伝記一、戯曲、詩一、評論二、説明文二、古文八篇、二三篇が収められている。古文には、和歌一篇が含まれる。

本巻から古文の収録数が多くなっている。教授要目に従い、中学三年の発達年齢に適した教材を用意する編集姿勢である。しかし、古文をただ単に並べることはしていない。また、自然に関する随筆や紀行文、詩、和歌・短歌が収められているのも特徴である。

#### 行的認識

一課「道」（芳賀矢二）は、道の意義を説く評論である。道とは人の依るべき所の意で、道徳的な意味が主となっていて単なる術とは違うと述べられる。教育の本義も、すべてを修行として一貫し、道が根底をなすのでなければならぬとし、祖先が一芸を学ぶにも常に道としてその修行に志し、不惜身命の覚悟で志業の大成を期したことを考えるべきであると締めくくっている。『研究』では、本文の成立に関して、芳賀が一九〇一（明治四四）年に朝鮮総督府で講演したものがもとになっていること、緒言に「要は国民性の見地から、教育勅語の主旨を述べたものである」と記されていることが紹介されている。西尾は、そのことを承知の上で巻五の冒頭に配している。採録の趣旨では、「日本文化の根底であり、日本国民の人間の教養の精髓である道



の自覚を説いた文で、民族的特質を知らしめ、国民的陶冶に資すべき国民的教材である。／この意味に於て、これを巻五の巻頭に置き、本学年に於ける国語教材の出発点であり、帰着点であらしめようとした」と述べている。

この一課に対応して二課では「道を知れる者」(吉田兼好)が収められている。道を究める意義とその具体的な姿を示した四篇の章段、「高名の木のぼり」、「亀山の御池」、「陸奥守義盛」、「吉田と申す馬乗」を取り上げている。これらは今日の古典教科書にまで収録されている作品である。『徒然草』は西尾の国文研究にとって中心的な対象である。

#### 国民精神の涵養、尊皇思想

一三課「乃木大将の殉死」(徳富蘇峰)は、遺言書に記された乃木大将殉死の真相を語る。それによると、乃木は明治十年の役で軍旗を失った責任を取るため死の機会を待っており、二児を先に戦死させ、親子三人で死ぬつもりであったという。

六課「熊野落」(太平記)、七課「正行の参内」(太平記)、八課「熊王の発心」(吉野拾遺)、一四課「故郷の花」(平家物語)、一五課「小枝の笛」(平家物語)、一六課「扇の的」(平家物語)と、軍記物語を連続して収めている。吉野拾遺、太平記、平家物語から収録されている。どれも三頁から六頁の短い文章である。

『研究』では、「吉野朝の文学は、その時代が非常時であつただけに、平常には見られないやうな尊皇・愛国の至情が迸り流れてゐて、後代の国民がこれを詠んで感奮。興起せざるを得ないものが少くない。その皇居の地であつた吉野山を序篇として、吉野朝文学から三篇を掲出し、当時の事件と人情とに触れさせ、国民的自覚を促さうとする」と採録の趣旨を述べている。ここにも明らかなように、「太平記」を歴史的文化的文脈ではなく、その当時の政治的文脈に位置づけてしまっていると言わねばならない。

#### 自然と紀行

四課「春三題」(吉村冬彦)は、植物と空の雲を例に、自然は冬の間に春の準備をしていることを科学者の目で説明している。

一一課「山上の靈氣」(松本亦太郎)は、別世界の山上では雲霧が奇異な様相を示し、あたかも巨人が現れ、背後には虹の環がかかるようであると述べている。碓氷峠の現身仏の伝説や恵心の山越弥陀の図もこうした現象からきたものである。

一八課「仏法僧」(高浜虚子)は、高野山まで仏法僧の声を聞きに行ったときの紀行文である。

二〇課「詩二篇」は、木の風がのぼる情景を詠う「風」(島木赤彦)と吹く風に揺られる自分と鳥、尾花を描く「風」

(北原白秋)の二篇である。

二一課「翼」(吉江喬松)は、小高い丘の上から秋の空を見るときに自然描写である。鳥が飛ぶ翼の音、虫の声、月の光、雁の群れの羽ばたきの音が空に乱れて不思議な波動を起し、地上の草木や人家の屋根に奇妙なりズムを響かせていく様子が語られる。

追憶、童心、家族、故郷

一七課「水郷」(北原白秋)は、紀行文的色彩の濃い随筆である。白秋の郷里柳川について愛情をもって語る。水郷柳川は、変化多い少年の秘密を育む場所にふさわしく、しながら水に浮いた灰色の樞であるという。四季ごとの自然行事が語られ、文末には白秋の詩「水虫の列」が収められる。

小説、童話

一二課「非凡なる凡人」(国木田独步)は、多くの国語読本に収められている小説である。非凡なる凡人、桂正作は、愛読書の西国立志編を地で行く人であり、苦勞して横浜の会社で技師として働いているというくだりを抄録している。

一九課「仁王」(夏目漱石)は「夢十夜」の一節である第六夜の話である。運慶が護国寺山門で仁王を刻んでいるのを見た。運慶は、鑿と鋸で木の中に埋まっているのを掘り出しているという内容である。文末に、漱石のテキ

スト本文にはない漱石の俳句「風に裸でおはす仁王かな」が付されている。

学問・文化・芸術・スポーツ

三課「極東に於ける第一日」(小泉八雲)は、八雲が初来日したときの印象を味わい深い筆致で表現している。八雲は、書物や空想ではない日本の街々を初めて人力車で通った。人力車から見た富士には柔かい明澄さがあつた。「一切のものが妖精の世界のものやうに見える」と感懐している。青い屋根の小さな家、紺の暖簾の店頭、紺の着物を着た微笑を含んだ小さな人々、和漢の文字を染め出した神秘的な旗、紺暖簾、垂直排列の文字、職人の衣服にある生命のある均斉のとれた文字、八雲はその事物の不思議さに目を回す。八雲にとって特に文字は印象的だったようである。日本人にとって表意文字は絵画であると思った八雲は、神秘的な漢字が自分の横を疾走する夢を見たと言語する。

五課「吉野の奥」(吉田絃二郎)は、吉野の西行庵を訪ねた紀行文である。三輪、畝傍を通り吉野川から千本・中千本の見頃の桜を横目に西行庵を目指す。義臣村上義光の墓をめぐる「吉野山は花の山であり、同時に数々の人間哀史の山である」と嘆懐する。桜本坊、竹林院には昔の山宿の面影を見る。さらに高野山を目指すも、出会った杣人から西行庵には今日中は無理と言われ、吉野の満月と落日を見

て、蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」を思い出す。翌日、再び西行庵を目指す。道中、七八人の大峯詣りの道者と出会い、芭蕉の「露とくく」の句碑がある苔清水で漱ぎ飲む。いよいよ西行庵である。「眺むるに、佇むに、ただ涙流るゝほどの尊さ」を覚え、「よしの山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらむ」の歌を思い、西行の悲しい決心が目に見えるようである。「西行が人生の寂漠をじつと見つめてゐたであらう日の静けさが今も漂うてゐた」と締めくくっている。

この紀行文も、日本文化の深さを吉野の自然に関わらせて述べるのであるが、その底流には道への心が横たわっていることが分かる。行的認識に培う文章である。

一〇課「墨汁一滴」(正岡子規)は、病床から藤の花、山吹の花を見ながら歌心について考える随筆である。「瓶にさす藤の花ぶさみじかければたみの上にとどかざりけり」など、藤の花の短歌六首、「裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花」など、山吹の花の短歌五首を添える。

二三課「隅田川の水」(島崎藤村)は、隅田川について書かれた随筆である。隅田川を「お前」と親しく呼びながら、河岸の変遷と工業化で変貌し川の様子を憂いながら、武蔵野の昔から大改革までを見てきた隅田川はセーヌでもテー

ムスでもなく親しみ深い隅田川であると述べる。

二三課「ツェッペリン伯号を迎へて」は、莫大な賠償金で苦境に立たされていたドイツで、若い企業家たちが活躍する話題をもとにした西尾自身の書き下ろしである。ツェッペリン伯号が日本上空に到達させた機会に科学者エッケナー博士が語った言葉に感動して、日本文化建設のための国民の奮起を求めている<sup>3)</sup>。

#### 古文

九課「国上山(和歌)」(良寛)(橘曙覧)(平賀元義)は、良寛の和歌「むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば」を筆頭に良寛の歌六首、曙覧三首、元義三首を収録している。どれも、追憶、童心、故郷をテーマとしている。「研究」では、「近世末期に出現した万葉系統の歌人三人の作」を掲げたことを述べた後に、「吉野山を舞台とした、国民的精神の発露に成る作品の後を承けて、或は人間の純情に於て、或は愛国の至情に於て、或は又、志操的矜持の高かつた点に於て、一脈相通ずるものがある」と解説されている。巻五の教材配列の文脈に帝國的な視点が強く作用していることは指摘する必要がある。

## 2 卷六について

卷六のテーマは、学問や芸術の意義を明確にした文章や道を究めた人の生き方を述べた評伝を学ぶことにある。

卷六には、小説一、随筆一、紀行文一、評伝四、戯曲一、詩二、評論四、古文五、近古文一篇、計二〇篇が収められている。古文には俳句と狂言が含まれる。

卷六では、現代文と古文を適宜組み合わせたかたちで道の意義を説いている。

## 行的認識

一六課「檜原峠越」(大島亮吉)は、雪が多い檜原越えに躊躇したが、先に踏んだ一人の足跡を頼りに越えることができたので、その旅の商人に感謝しているという内容である。先人の足跡に学ぶということを比喩的に述べている。

二〇課「人間の価値」(安倍能成)は、総督府山林部の林業試験所技師で朝鮮古陶の研究家でもあった浅川巧さんの逝去を悼む評伝である。朝鮮人の心をつかんでいた彼の人格を偲びながら、カントの言う人間の価値を実証した人であったと回想している。

## 国民精神の涵養、尊皇思想

一〇課「愛国者福沢諭吉」(小泉信三)は、愛国者としての福沢の姿を伝えている。福沢は文明開化は封建門閥制度

を打破したが同時に無気力なものになりやすかったとし、民権論のための国権論、愛国の意義を説いた。これは、「学問のすゝめ」以来の封建的卑屈を痛撃して、不覇独立の個人の価値を強調した所以であると福沢の功績を讃えている。

## 自然

一課「秋」(綱島梁川)は、秋の力はその衣にあるのではなく赤裸々の事実、思想にあるとする。興味深い評論の冒頭に引用されている「あれこれをあつめて霞む春の朧」は芭蕉の句である。

二課「神ほぎ(詩)」(蒲原有明)は、晴れわたる秋の空に黄金の銀杏、妙なる注連木は神祝(かむほぐ)をなしているという自然の神秘を謳った詩である。

## 小説、童話

四課「天籠」(森鷗外)は、父が死んで貧しくなった絵描きの青年M君が、文房具商と恩師W先生に助けられ絵描きが続けていった物語である。

## 学問・文化・芸術・スポーツ

三課「松下村塾」(徳富蘇峰)は、松下村塾の歴史的な意義を語っている。幕府顛覆の卵を孵化した養育場であった松下村塾を育てたのが吉田松陰であったと説明している。

一一課「アインシュタイン」(吉村冬彦)は、アルベルト・アインシュタインの評伝である。彼は、しだいに理論家と

しての能力を育て、ついに相対性理論に到達する。その背景には音楽などの芸術に親しんだことがあったという。夢を見る素質があった彼は、夢の国に論理の橋を架けたのであるとする。

一二課「米国の一面」(厨川白村)は、米国の建国を成し遂げたのは宗教的色彩を帯びた理想主義に伴った清教徒の物質的努力と現実主義的精神であり、現在の米国文明には清教徒の理想主義の面影が見られるとする。

一四課「元寇」(三宅雪嶺)は、元寇の真因に迫ろうとした評論である。元との拒絶は北条時宗だけの意思ではなく国民の世論であったので拒絶は当然である。また、元に勝ったのは上皇の祈願であったが、台風のために実力が発揮できなかったことは、その後の外への発展にとって残念であったという内容である。

一五課「日蓮上人」(高山樗牛)は、日蓮上人の評伝である。日蓮は傲慢でもあり情愛もあったが、この二者が表裏し融合して豪傑の人格を造っていたという。文末には日蓮宗教義「開目鈔」の一節「我日本ノ柱トナラン(以下省略)」が付されている。

一八課「井伊大老(戯曲)」(中村吉蔵)は現代史劇である。井伊大老に内談した松平信茂に、自らの行動の責任を説き、礼を尽くして断る井伊大老の姿を描く。

一九課「出蘆(詩)」(土井晚翠)は、庵住していた諸葛孔明が、劉備の三度にわたる訪問に応えて立ち上がるに至った状況を述懐している場面を詩の世界で描いたものである。晩翠の『天地有情』から採られている。著名な歴史を韻文で表現する文体を学ぶ点でも意義がある。

#### 生活・労働

九課「労働」(内村鑑三)は、キリスト者の立場から信仰の意義を説いている。キリストは労働は神の真理を実得すること、神の宇宙に接することであると言う。労働のあるところに信仰があるのである。信仰は神のために自己を捨てることであり、愛国は国のために自己を棄てるということであると説いている。

#### 古文

五課「芸能逸話」(古今著聞集)は、能因・時秋・鳥羽僧正が、それぞれ和歌・管弦・絵画の道において、刻苦勉強して、その徳を示した話である。

六課「芭蕉の臨終」(花屋日記)は、臨終における芭蕉の心境を語っている。『研究』には「俳諧文学に生命を入れ、日本文学を象徴の深さにおいて発展させ、同時に人間としての完成を体現した芭蕉の臨終記」とある。

七課「雑煮(俳句)」(与謝蕪村)は、天明俳壇の蕪村の俳句十五句である。『研究』に、「巻四ノ一〇「夜長」の子



規の句の後を承けて、その子規が新にその価値を発見し、俳諧史上の位置を与へた蕪村の句を掲げ、芭蕉―蕪村―子規と展開来つた俳諧史上の最も著しい代表者の作品を辿つて、やがてその源頭を汲ましめやうとしたものである」と説明されている。

八課「不動智」（沢庵）は、一物に執着せず自在に動く心を描いている。

以上の三篇は、どれも道を究めた人物の話である。

一三課「鎮西八郎為朝」（保元物語）は鎌倉期の軍記物語で、単独で大事の門を固めた為朝とその軍略を描いている。一七課「狐塚（狂言）」（続狂言記）は、主人と次郎冠者を狐と間違えた臆病な太郎冠者の「狐塚」全文である。

#### （4）第四学年―巻七と巻八について―

##### 1 巻七について

巻七のテーマは、これまでの行的認識の学習を基礎に、主に芸術と文章を学ぶことにある。

巻七には、小説二、随筆四、評伝一、詩一、短歌一、評論五、古文八篇の二二篇が収められている。

巻七からは第四学年になり文章の水準が飛躍的に高くなっている。

巻七は、一課が島崎藤村の「結晶の力」という文章論、二課が和辻哲郎の「日本絵画の特性」という芸術論で始められ、歌論、文章論など多くの芸術論が語られている。評伝も、狩野芳崖やケーベル先生を対象にしたもので、彼らの人生を描きながら芸術や学問の高みについて述べている。また、小説も芥川龍之介「戯作三昧」で芸術を語る。西尾は「研究」で「前学年を通して読み来つた日本文化の根本精神ともいふべき「道」の精神が、如何なる姿をとつて現代文化の上に存続し発展してゐるかを考へさせることも可能である」と述べて、巻七での学習指導への期待を述べている。

##### 行的認識

一課「結晶の力」（島崎藤村）は、文章を書く上での心構えを説く。筆者自身の四つの体験と文章を書く道について対比的に論じている。隅田川での水泳体験からは「根気」の大切さ、信州小諸での弓道体験からは「自己」を正すことの意義、同じく小諸での耕作経験からは「試みる」といふことは「悟る」といふことの初であること、隅田川での舟漕ぎからは「結晶の力」の意義について考察している。採録本文の終わりには、次の二つの文章が添えられている。

文章を添削することは心を添削することだ。その人の心が添削されないかぎりには、その人の文章が添削されよう筈がない。

すぐれた人の書いた好い文章は、それを黙読玩味するばかりでなく、時には心ゆくばかり声をあげて読んで見たい。われわれはあまりに黙読に慣れすぎた。文章を音読することは、愛なくては叶はぬことだ。(飯倉だより)

文章の道を論じた本文にあえて二文を添えたところに西尾の立場がある。文章を書くという制作だけでなく、読むという行為の実践性に着眼しているのである。尚、「飯倉だより」は、『芸術自由教育』に連載したものを一冊にまとめ発行したものである。

五課「歌の響」(島木赤彦)は、「万葉集」を例に引いた歌論である。歌は調子、声調、格調が重要である。また、調子の上に柔かき緊張、強き緊張、暢やかな緊張が大切である。これが快適に現れているのが万葉集である。この歌の調子を万葉調と唱えている。

一二課「随筆の説」(五十嵐力)は文章論である。思無邪の心からぼろりぼろりとこぼれ落ちる随筆に味があるとして「枕草子」を例にあげている。随筆のもう一つは知り尽くし悟りぬいた人の心の鏡に映った影の自由な捕捉をした

ものであるとして、「徒然草」を例にあげている。一方で、江戸時代の随筆は銜学であり、文学ではないと厳しく批判する。論語や老子は人生修養の面で芸術的な磨きがかかっている和高い評価を与える。文末には、「徒然草」の冒頭「つれづれなるまゝに(中略)ものぐるほしけれ」が添えられている。

一七課「俚諺論」(大西祝)も文章論に通じることわざ論である。大西は、俚諺には妙味があり、律語的であり、具象的であるとする。パラドックス、対照、比照、暗喩、隠喩にも富み、詩句と似ているので、俚諺を研究すると、国民の歴史、気質、風俗、学術、宗教、社会制度等の生活とその理想を発見することができると述べている。

一九課「万物の声と詩」(北村透谷)は、万物にはおのずから声がある。その声は、宇宙の調和から発せられる。芸術は、その万物の声の具現である。詩人は、宇宙の妙機を聞き、この万物の声を世に啓示する。

#### 小説、童話

小説は、七課「戯作三昧」(芥川龍之介)と一一課「寒山拾得」(森鷗外)という龍之介、鷗外の代表作で、現代の教科書にまで収録されてきている。

「戯作三昧」は、馬琴が創作過程での苦境から脱して戯作三昧の境地を確立していく姿を龍之介らしい筆致で描く。

「寒山拾得」は、唐代、国清寺の僧、豊干に頭痛を治してもらった閭丘胤が国清寺を訪ねたところ、そこで豊干が言っていた寒山拾得に出会う話である。『研究』では、「寒山・拾得二仙の風格に触れさせて東洋的人間観の神髓を窺はしめ、且本課に現れたさまざまの人間の境位に照して自己を反省させることによつて、人間的教養にも資したい」と述べている。この二作は、単なる小説の鑑賞ではなく彼の行的認識に通じるものを讀んでいる。

#### 学問・文化・芸術・スポーツ

二課「日本絵画の特性」(和辻哲郎)は、日本絵画の特性と芸術的な国民性について論じている。「気合」としての釣合に加え、独立した構図の展開によつて全体としてのまとまりを作り出しているという特質を持っている。この点が芸術的な国民としての世界での認知となっている。

三課「狩野芳崖」(岡倉寛三)は、畢生の傑作、観音大士の像を制作した芳崖の評伝である。芳崖は、「人生の慈悲は母の子を愛するに若くはなし。観音は理想的の母なり。万物を發生・煦育する大慈悲の精神なり。創造・化育の本因なり。余此の意象を描かんと欲する。玆に年あり、未だ適當なる形相を得ず」と語った。芳崖は代々萩藩の画師の家に生まれた。狩野の門に入ったが、当時の狩野の画風は粉本模写の時代であった。芳崖はこれに満足せず、画の要は

一意直到、唯心裏の影を以て紙上の形となすに在りと考え、芳崖の画風を確立していった。芳崖は常に人に「人各々独立の宗教なかるべからず。美術家には美術宗あり。復何ぞ之を他に求めんやと。亦以て其の造詣を見るに足らん」と語っていた。

一八課「ケーベル先生」(夏目漱石)は、漱石が安倍能成とともにケーベル宅を訪問したときの記録である。漱石は、そのときの印象から、「ケーベル先生の生活は、そつと煤煙の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した様なものである」と述べている。

#### 文化

四課「法隆寺」(高浜虚子)は、法隆寺の色と音に着目している。金堂の仏体を描いた壁画には、珊瑚末の丹い色がある。千年の古色を呈して尚鮮明な光を湛えている。夢殿の廊下の鈴の音色は黄金を多く入れた鈴で、その音色は壁画の色が出したと思われるほどである。

二二課「籠安寺の庭」(萩原井泉水)は、相阿弥の作った龍安寺の庭の美しさを述べている。この庭の石は生きてゐる。造園の材料に石ばかりを選んだのは、彼の気持ちを自然に委ねないで表現するためであらう。天然の模写ではなく純粹に自分の気持ちを表現したのである。これは、近代の表現派の意図と相通ずるものがある。景物を用いないで

四季の空気そのものを感じさせようとした石ばかりの庭は微妙である。

この二編は、文化と括るよりも、色彩美や庭園美という芸術の問題である。

#### 韻文の扱い

六課「水の音（和歌）」（西行）（源実朝）は、それぞれ西行と実朝の和歌が収録されている。『研究』は「歴史的に和歌を見ることは第五学年の課程になつてゐるので、ここでは形態的に和歌の特質を握らせる為に」、国民歌人の西行「万葉集」とともに現歌壇の典拠となつてゐる実朝の実作を示したと解説されている。

二〇課「斑鳩宮（詩）」（三木露風）は、斑鳩の宮で聖徳太子の事績を讃える詩である。

#### 古文

九課「平重盛」（平家物語）、一〇課「福原落」（平家物語）は軍記物語、一二課「ゆく川の流」（鴨長明）、一四課「法師の話」（吉田兼好）は「方丈記」と「徒然草」からの収録である。

八課「源氏物語論」（本居宣長）は、観賞と批評の点から源氏物語の価値を個性的。写実的表現、心理描写の精細さ、平凡・自然の価値の發揮を指摘している。

一五課「学問」（松平定信）は、近世随筆の代表作「花月

草紙」から採られている。学問は道を学ぶことであり、修行であると述べた一文である。

一六課の「雅文四篇」も同じく近世の随筆である。「隅田川の雨」（橘千蔭）、「曇る夜の月」（村田春海）、「砧を聞く」（清水浜臣）、「夜学」（中島広足）は、江戸期の復古運動である擬古文の典型的な文体として紹介されている。

二一課「月の兎」（良寛）は、あはれな月の兎の古伝説が長歌の形態で詠われている。良寛の「万葉集愛誦はその歌体の上にも影響を示し」と『研究』にある。また、「詩形態の作品の一例として掲げた」が、「来るべき詩が、かういふ伝統的なものからも新しい発展の契機を見出さうとしてゐる関係から、又長歌に入る準備として」採用したと解説されている。これは童心・追憶をテーマにもつ一方で、万葉集愛誦という良寛の道を示すものでもある。

## 2 巻八について

巻八は、都市論、歴史と伝統、精神のありようについて、評論、評伝、紀行文を中心に構成されている。

巻八には、小説一、随筆一、紀行文二、評伝三、戯曲一、評論五、説明文一、近古文一、古文五篇、合計二〇篇が収められている。古文には、俳句、歌謡、戯曲がそれぞれ一

篇ずつ含まれている。

### 行的認識

一〇課「象山と松陰」(徳富蘇峰)は、近世末期の二国士の人物像を描いている。松陰は象山の門下に入り、ともに国事に殉じた。しかし性格も考え方も対照的であり、松陰は率直であり象山は莊重であった。松陰は攘夷論者として刑死せられ、開港論者象山は松陰が点火した尊皇党の刺客に暗殺されるという悲劇が待っていたと述べている。

一九課「人道」(二宮翁夜話)は二宮尊徳の夜話を記録したもので抄録されている。近世の経済生活における人の道を説いている。

### 国民精神の涵養、尊皇思想

一一課「人臣の道」(北畠親房)は『神皇正統記』の後醍醐天皇の條が抄録された。西尾は、本文の解題で「国体の尊嚴と皇位継承の正統とを明らかにし、以て大義名分を強調し」、「近世の史学界・思想界に甚深の影響を及し、明治維新の原動力をなした」と述べている。文末には、「大日本は神国なり」とある。

### 小説、童話

四課「東洋の詩境」(夏目漱石)は『草枕』からの抄録である。「智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」という人口

に膾炙した場面である。ここに詩人と画家の使命がある。自然は我々を醇なる詩境に入らせる。それは非人情の詩境である。

### 学問・文化・芸術・スポーツ

#### ○都市論

一課「都市美論」(佐藤功一)は、近代都市の美を日本と西洋を比較しながら述べた評論である。筆者は、都市の真の美は、人間の知識と意志で有機的に作られるべきであるとして、広場に水、地下線式鉄道、電気自動車、アスファルトが道にあり、住宅地、公園等、周辺の工場の美化などにより、都市の美観が市民の慰安、健康、精神的向上、風紀、経済にも重要なものであることを強調している。

二課「巴里通信」(島崎藤村)は、一課の都市論を受けて、西洋の都市を論じた文章を配している。内容は以下のとおりである。巴里は一つの建築物であり傑作である。日本との自然風土の違いもあるが、巴里全体が一大倉庫のように歴史的なものを保存している。巴里が芸術の都というのは、西洋だけでなく東洋からも可能な限りのものを収集しているからである。

#### ○歴史と伝統

三課「中宮寺の観音」(和辻哲郎)は、至純で神聖な美しさを保っている中宮寺の観音は、日本文化の出発点でもあ



るが、これは日本の自然から生み出されたと述べている。

九課「長柄堤の決別」(坪内逍遙)は、晩秋、朝霧の立つ長柄堤で、片桐且元と木村重成が豊臣氏の行く末を案じている場面を採用している。

#### ○ 西洋文化に見る人間精神

一二課「哲人の養成」(安倍能成)は、哲学者であり、日本型教養の代表的論者である安倍の真骨頂を示す評論である。梗概は以下のとおりである。プラトンの理想国の目的は道德の実現である。それは哲人によってなされる。哲人の資格は、その精神的素質において哲学を好み、真理を熱愛し、強い性格の勤勉な人である。哲人は、十歳からの準備教育、二十歳からの学問研究、三十歳になると弁証論を修め、五年間で哲学研究の奥義に沈潜する。三十五歳から五十歳までは、世間学を修め、実生活の経験を積む。これらのことから、統治者を選ぶのである。

一三課「浄火」(阿部次郎訳)は、フリッツ・カーンの『神曲入門』を阿部次郎が訳出したものである。南半球の大洋にある浄火の山島にダンテとヴィルジリオが地獄をめぐる岸边に出た二人は煉獄前界で人格の浄化と沈潜との予備条件である精神の凝集を行う。日が沈み、信仰と希望と愛とを意味する星を見て、新しい日を予約する。ダンテの登山の第一日は、憧憬と予感と準備であったという内容の場面

である。

一四課「人間ゲーテ」(茅野蕭々)は、詩人ゲーテの評伝である。内容は以下のとおりである。ゲーテは、世界文学上の天才である。彼の精神の宇宙的包容力、人性と事象との自然を獲得した功績、事実が詩的であることを鮮明にしたことは彼の重大な意義である。そして彼は、人間のうちの最も偉大な人間であることを見ておきたい。

一五課「進軍」(八代幸雄)は彫刻の鑑賞論である。筆者は「進軍」には人性の厳肅さが示されていると述べる。朝光を浴びる「進軍」には希望に跳躍している若武者と人生の実相を踏み行く老兵の姿が見え、夜霧に覆われる「進軍」からは軍神の雄たけびが聞こえ、芸術の啓示と交響があると評価している。

この四篇は、日本型教養の特徴をよく示した文章で揃えられている。

#### ○ 日本文化に見る人間精神

一二課から一五課までが西洋文化の精神的なありようを述べた評論、評伝であったのに対して、一六課から一八課までは日本的な精神のありようを語る文章を収めている。

一六課「大和民族の固有性」(五十嵐力)は、『作文三十三講』のうちの日本文学史を考察した後半部分からの抄録である。奈良朝以前の文学は古事記、日本書紀の歌と延喜

式の祝詞であり、その歌の例として、日本武尊の歌がある。日本武尊は大和民族の固有性を備えている。また須佐之男命の高天の原に上られた条も国民性を示しているという内容である。

一七課「舞へ舞へ蝸牛」(歌謡)(梁塵秘抄)は平安期歌謡、一八課「茶の宗匠」(岡倉覚三)は日本の伝統文化としての茶道論である。茶の宗匠たちは茶室で得た高い教養で日常生活を律していたが、庭園、茶器、織物、絵画、漆器などには茶の宗匠の示した跡があり、その源は本阿弥であると述べている。

二〇課「手首の問題」(吉村冬彦)は、巻七・八で学んできた学年の総仕上げとして提示されている。冬彦は手首の重要性を科学的な見識として提示している。バイオリンやセロを弾くとき、手首が重要であり、その他の技術の場合も同様である。科学や生活の場面でも手首は重要であると述べている。

巻八には、『国語』に示されている西尾の卓抜な編集姿勢が典型として現れている。西尾は小説を一つの文芸として単独で鑑賞させる態度を取ろうとしない。この場合では、日本と西洋、東洋と西洋という対比的な構造に漱石の『草枕』を置いている。これは、実に理に適っている。小説家が作品を生み出すときには、さまざまな文脈の交差する地

点を意識している。ある作家は、社会的な文脈と時間的な文脈を意識しながら書くであろう。また、別の作家は、文化的文脈と人間関係的な文脈を強く意識するという具合である。

巻八の場合には、都市文化論である一課「都市美論」と西洋文化論である二課「巴里通信」、日本文化論である三課「中宮寺の観音」に小説である四課「東洋の詩境」を置くと必然的に交響的な空間が形成される。

#### 古文

古典分野では松尾芭蕉の俳諧を収めたところに第八巻の特徴がある。芭蕉の俳諧紀行文である五課「奥の細道」と六課「陽炎(俳句)」に加え、七課「蕉風」(藤岡作太郎)がある。芭蕉の言語活動としての紀行文とその実践の成果を重ねて学ばせようとする意図がある。さらに、松尾芭蕉その人を理解させるための評伝を挿入しながら、鑑賞のあり方をも示している。

ここでも、西尾の言語活動論の具体化が見えるのである。まず芭蕉の紀行文を紹介して、優れた言語実践としての俳諧を創出する型を示している。そして、そうした実践が生み出す具体的な産物としての俳句を学ばせる。その上で、再び芭蕉の人柄を知らせ、加えて俳諧の鑑賞のあり方を示すという手順は、これまでもすでに見てきた西尾の言語活

動論の特徴であった。

尚、八課「鉢の木（戯曲）」（観世謡本）は能の著名な演目であり、一七課「舞へ舞へ蝸牛」（歌謡）（梁塵秘抄）も、後白河法皇選による平安期歌謡の代表作である。これも西尾の言語活動論の視座からの選択であると見てよい。（以下続稿）

## 注

- (1) 「国語」と表記するのは、教科としての「国語」が一九世紀から二一世紀前半にかけて日本近代社会で歴史性・思想性を帯びた教科名として登場したことを明確にするためである。筆者は、「国語」科は将来的には日本語基礎科と日本語実践科に再編されることがふさわしいと考えている。本稿では岩波編集部編の「国語漢文科」教科書は『国語』と表記する。
- (2) 拙稿「西尾実の教養論と教材論」『広島経済大学創立四十周年記念論文集』二〇〇七年、一〇九九～一二二頁。
- (3) 朴貞蘭「西尾実と「国語科」教科書―戦後検定期初教材における「連続性」の問題を中心に―」『名古屋大学国語国文学』第百号、名古屋大学国語国文学会、二〇〇七年、一二九～一四二頁。朴は、松崎正治「西尾実の戦争責任」『文学と教育研究報告』第五集、一九八八年、鳥取大学教育学部国語科教育研究室』や佐藤泉『国語教科書の戦後史』（勁草書房、二〇〇六年）など日本国内で刊行された多数の「国語」教育関係書、論文を参照している。この研究姿勢は「国語」教育の枠の中で視界が閉ざされがちな研究に

対しての警鐘となっている。

- (4) 「生きた言葉」と行的認識の関係については拙稿「西尾実の教養論と教材論」で詳細に論じた。
- (5) 「ツエッペリン伯号を迎へて」が『国語』改訂版で「日本の魔法鏡」と差し換えられた経緯については拙稿「西尾実の教養論と教材論」で論じた。